

# 阿波國府跡第9次調査概報

— 1 9 9 0 年 度 —

1 9 9 1

徳島市教育委員会



# 阿波国府跡第9次調査概報

— 1990 年度 —

1991

徳島市教育委員会

## 序 文

国府は、奈良時代に国家機構が中央集権的に組織化されるなかで、その基幹組織として全国に設置された地方行政官庁です。

阿波国府は、今日でも地名として残っておりますように、徳島市国府町の府中、観音寺あたりを中心に造営されていたと言われており、県下でも最大級の重要遺跡として位置づけられています。

昭和57年度より国庫補助を受けて継続してまいりましたこの阿波国府跡の「重要遺跡確認調査」も、本年度で9年目をむかえました。

阿波国府跡は、方6町とも方8町とも推定される規模の壮大さゆえに、未だその全容は把握できておりません。しかし9年間の継続調査において、観音寺を中心とする地域で国衙跡を思わせる建物跡や膨大な量の遺物が出土し、注目すべき成果があらわれはじめています。

本年度は、国府の範囲を抑えることを目的に調査を実施いたしました。

調査にあたりまして、ひとかたならぬ御理解・御協力を賜りました地権者の方々をはじめとする地元の方々ならびに御指導を賜りました研究者の方々に、感謝の意を表し御礼申し上げます。

平成3年3月30日

徳島市教育委員会  
教育長職務代理者

教育次長 小林 實

## 例　　言

1. 本書は、平成 2 年度に国庫補助を受けて実施した阿波国府跡の重要遺跡確認調査（第 9 次調査）の概要報告書である。
2. 調査は、徳島市教育委員会が主体となり、平成 3 年 1 月 5 日から同年 3 月 30 日まで実施した。また、事務処理については徳島市教育委員会社会教育課が担当した。
3. 調査は、三宅良明（社会教育課主事）が担当し、調査員として高木 淳、佐伯俊裕、市川欣也、中野勝美、倉佐晃次が携わった。
4. 発掘調査地点は、徳島市国府町中 291-1 および国府町矢野 492-2 である。
5. 本書に収録した遺構の実測は、調査員が分担した。また、遺構図トレス、遺物実測・トレス、写真撮影は三宅が行った。
6. 第 2 図、第 5 図の地図は、「徳島市現況平面図 1:1000 昭和55年測量」を転載し、若干の削除・補正を加えた。
7. 土色の判定は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』1967 に拠った。
8. 調査にあたって、岡内三眞氏、島巡賢二氏より御教示をうけた。また、土地所有者の近藤武熙氏、鹿山庄作氏をはじめ、多くの方々の御援助を賜った。
9. 本書は、三宅が編集・執筆した。

## 本文目次

序文

例言

Iはじめに ..... 1

II市道地区の調査成果の概要 ..... 2

1 おもな検出遺構 ..... 2

2 おもな出土遺物 ..... 4

III溝添地区の調査成果の概要 ..... 5

1 おもな検出遺構 ..... 6

2 おもな出土遺物 ..... 6

IV小結 ..... 8

## 挿 図 目 次

第1図 阿波國府跡発掘調査地点周辺地形図	1
第2図 市道地区調査地点位置図	2
第3図 市道地区検出遺構配置図	3
第4図 市道地区出土土器実測図	4
第5図 溝添地区調査地点位置図	5
第6図 溝添地区Ⅰ・Ⅱ-A~F区検出遺構配置図	6
第7図 溝添地区SK-101および出土土器実測図	7

## 図 版 目 次

図版1 市道地区 I区遺構検出状況 (西から)	
市道地区 II区遺構検出状況 (西から)	
図版2 市道地区 SD-03検出状況 (南から)	
市道地区 SK-04遺物出土状況 (南から)	
図版3 市道地区 SK-03遺物出土状況 (北西から)	
同 上 (東から)	
図版4 溝添地区 I・II-A~F区遺構検出状況 (南から)	
溝添地区 SK-101遺物出土状況 (南から)	

# I はじめに

阿波国府跡の所在については、諸説存在する中、国府町中字田渕に所在する大御和神社ならびに大坊千福寺をそれぞれ西庁跡、東庁跡とする説が最も有力であったため、昭和57年度の第1次調査は、大御和神社境内において実施された。しかし、この調査で掘立柱建物跡2棟をはじめとする遺構、瓦塼類、陶硯などの検出をみたが、国府跡として特定するには至らなかった<sup>(1)</sup>。

近年、大御和神社の西方約750mの觀音寺神明で第6次・第8次調査を実施し、6次調査では「政所」の墨書き土器・「大」の籠書き土器・石帶・瓦塼類など国府関連の膨大な遺物と溝、大規模な掘立柱建物跡・井戸などが検出され<sup>(2)</sup>、8次調査においても一連のものと思われる建物群が検出された<sup>(3)</sup>。こうした経緯から、国府の中心部が従来よりも西方に想定される傾向が強まりつつある。

しかし、政所の所在地究明の重要性もさることながら、国府域の把握も依然未解決のままであり早急な府域確認が望まれる。今年度はこうした観点に立ち、現在初期国府域（一部後期国府域）として推定している府域の東限および南限の確認に焦点をあてて調査を実施した（第1図）。



- |         |                       |
|---------|-----------------------|
| 1. 市道地区 | A 初期国府推定府域（条里地割 方6町）  |
| 2. 溝添地区 | B 後期国府推定府域（条里地割 方8町）  |
|         | C 後期国府推定府域（正方位地割 方8町） |

第1図 阿波国府跡発掘調査地点周辺地形図 (1:25,000)

## Ⅱ 市道地区の調査成果の概要

本調査地は国府町中 291-1 に該当し、大御和神社の南西約 300 m にあたる。初期国府推定府域および条里地割による後期国府推定府域の東限ラインが推定される地点である。地目は休耕地であり海拔約 7.0 m を測る。調査は 200 m<sup>2</sup>を対象に、廃土処理の都合上 I・II 区に分けて実施した。

基本層序は、盛土（第1層 層厚約20cm），水田耕作土（第2・3・5層 層厚約25cm），休耕作土（第6a・6b層 層厚約15cm），黒褐色土層（第7a・7b層 層厚約20cm），にぶい黄橙色土層（第8層 層厚約30cm），弱粘質砂礫層（第9層）となっている。第7a・7b層は遺物包含層であるが、遺物の年代からの分層ではない。第9層以下は砂礫層が続くと思われる。



第2図 市道地区調査地占位置図(1:2000)

### 1. おもな検出構造（第3図）

現地表面下約80cmに存在する第8層を遺構面とし、掘立柱建物跡4、溝3、柵3、土壙4、ピットなどが検出された（第3図、図版1）。4棟検出された掘立柱建物跡はいずれもその一部の検出であり、全容が確認されていないため、正確な桁行×梁行寸法は不明である。

**掘立柱建物 S B - 01** 柱行 3 間以上 × 梁行 2 間以上の東西棟建物と思われる。4 棟中唯一梁行が磁北に対して平行する建物である。柱間寸法は柱行が東から 4.5 - 3.5 m, 梁行 2.6 m である。

**掘立柱建物 S B - 0 2** 桁行 3 間×梁行 2 間以上の建物であり、柱間寸法は、桁行が東から 2.6 m - 3.0 - 2.6 m、梁行が 2.0 m を測る。床束の有無は不明である。

**掘立柱建物 S B - O 3** 檻行 3 間以上 × 梁行 2 間以上の建物と考えられ、柱間寸法は檻行が東か

ら 3.8 - 3.6 m, 梁行が 3.5 m を測る。SB-02 とは切り合い関係になるが、両者の建物主軸は平行する。

**掘立柱建物 SB-04** 溝 SD-01 の南側に溝と平行してほぼ東西に桁行 4 間で存在する建物と想定され、柱間寸法が 2.8 - 3.8 - 2.8 - 3.8 m を測る。しかし南側への広がりが不明なため、梁行 4 間の建物である可能性もあるし、溝 SD-01 に沿って付設された柵の可能性もある。

**溝 SD-01** 調査区主軸に平行して走り、上幅約 1.5 m, 下幅約 80cm, 深さ約 50cm を測る断面逆台形状の溝である。埋土は 4 層に大別され、各層より遺物の出土を見る。

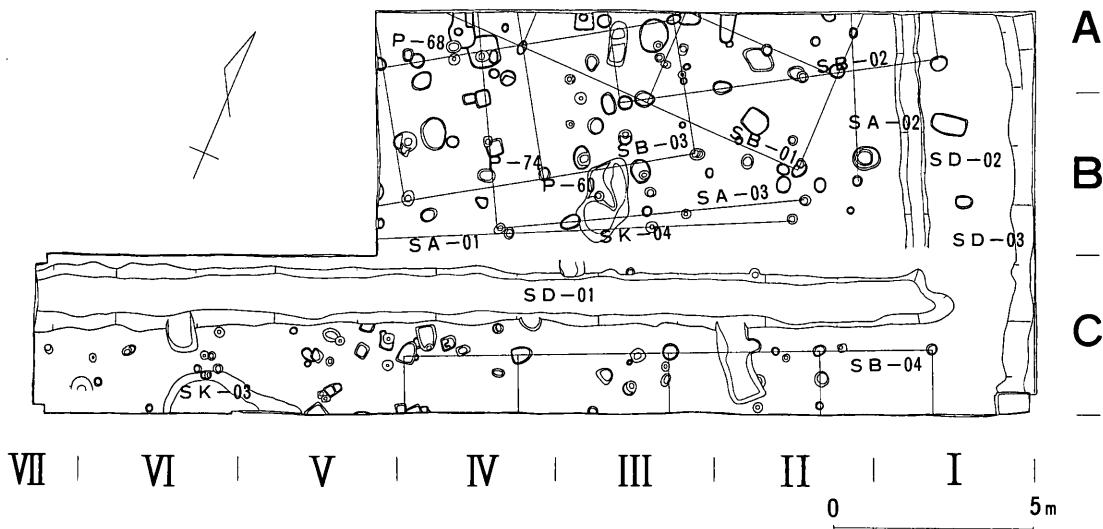
**溝 SD-02** I-A・B 区で検出された幅約 60cm, 深さ約 15cm の小規模な溝である。SD-01 の東端で直角に北に延びる溝で、埋土より SD-01 と一連の溝と思われる。若干の土器片を含む。

**溝 SD-03** 調査区東端で掘形の一部が検出されたのみで規模は不明である。遺物をほとんど含まない。

**柵 SA-01** II・III・IV-B 区で SD-01 にはば平行して検出された。柱間寸法は 3.5 m 等間でさらに西側へ延びるものと思われる。

**柵 SA-02** I-A・B 区で SD-02 に平行して検出された。SA-01 との連續性はないが、直交するかたちをとり柱間寸法も 3.6 m とほぼ等しく、両者は一連のものとして SD-01, SD-02 に伴う溝と考えられる。

**柵 SA-03** II～IV-B 区から V-A・B 区にかけて検出された。柱間寸法 4 m で西へ 2 間延びたところで北に直角に柱間寸法 2.2 m で延びて行く。建物 (SB-02) に付随する柵と考えられる。



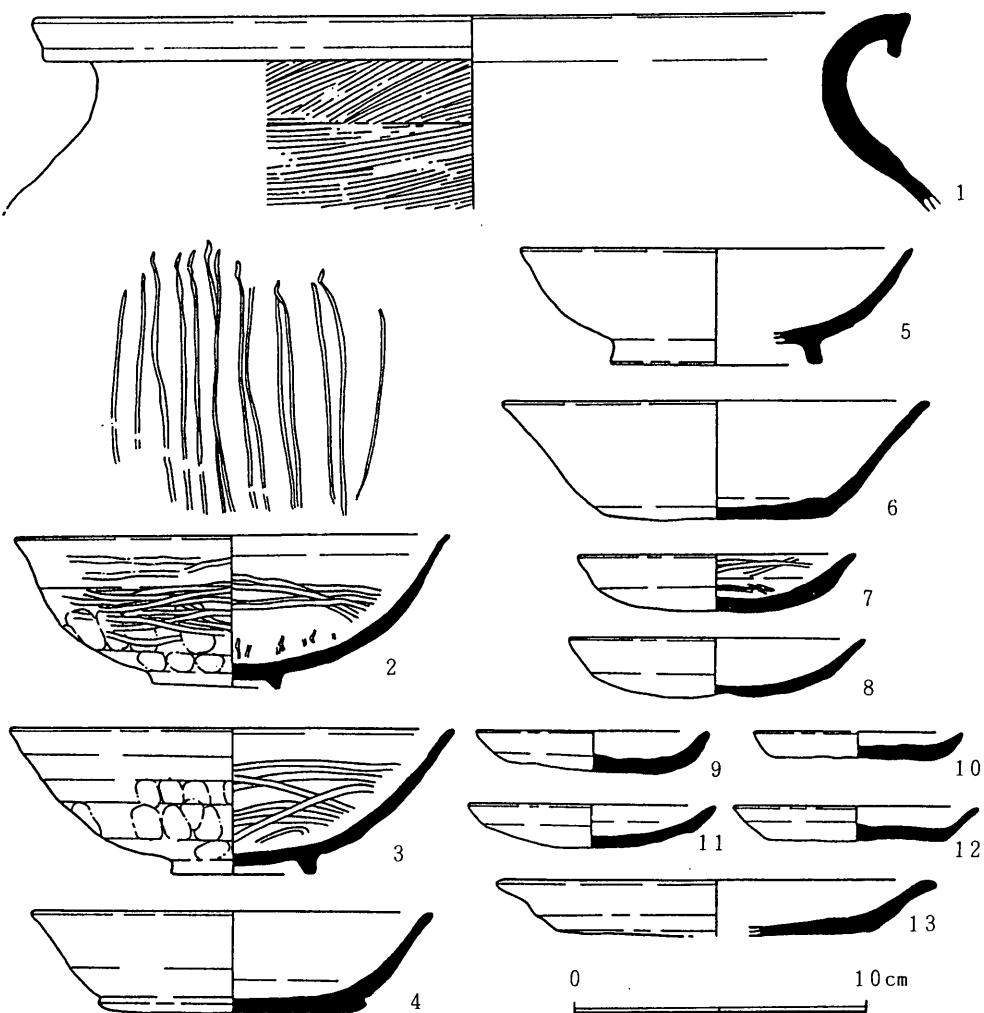
第3図 市道地区検出遺構配置図

**土壌SK-03** 長径3.5m, 深さ60cmを測る。上層埋土は第7層との分層が困難で、遺構掘形ラインも不明瞭であったため、包含層の落ち込みである可能性もある。埋土最下層中より土師器の杯、壺が出土している。

**土壌SK-04** 2.2m×1.1m, 深さ約30cmを測る。瓦器(椀5, 小皿2)・土師器(杯1, 小皿2)を伴う。

## 2. おもな出土遺物(第4図)

上記の瓦器の他、須恵器片(甕・杯), 土師器(椀・杯・皿・甕), 緑釉陶器片, 土錐, 平瓦などが出土した。1は須恵器で、体部外面は荒い刷毛調整である。土師器は完形の小皿が目立つ(9~12)。12はPit-68出土で底部に糸切り痕を残す。Pit-60, Pit-74からも小皿が複数枚出土している。5, 13はSD-01出土である。2~4, 7~10はSK-04一括遺物で、2, 3, 7, 8が瓦器である。他に3個体分の瓦器椀が供伴している。2は見込部に多条の籠書模様を施している。



第4図 市道地区出土土器実測図

### III 溝添地区の調査成果の概要

昭和63年、徳島県立国府養護学校のプール建設工事に先立って県教委が実施した高畠遺跡発掘調査において、平安時代の大型建物群の南側に東西方向に延びる土手状遺構と流路が確認された<sup>(4)</sup>。これらが国府の南限をなすものではないかとの見解に立ち、これより約600m西方の地点で、土手状遺構あるいは溝状遺構の検出に努め国府の南限を確固たるものとすることを目標に、今回調査を実施することにした（第1図、第5図）。

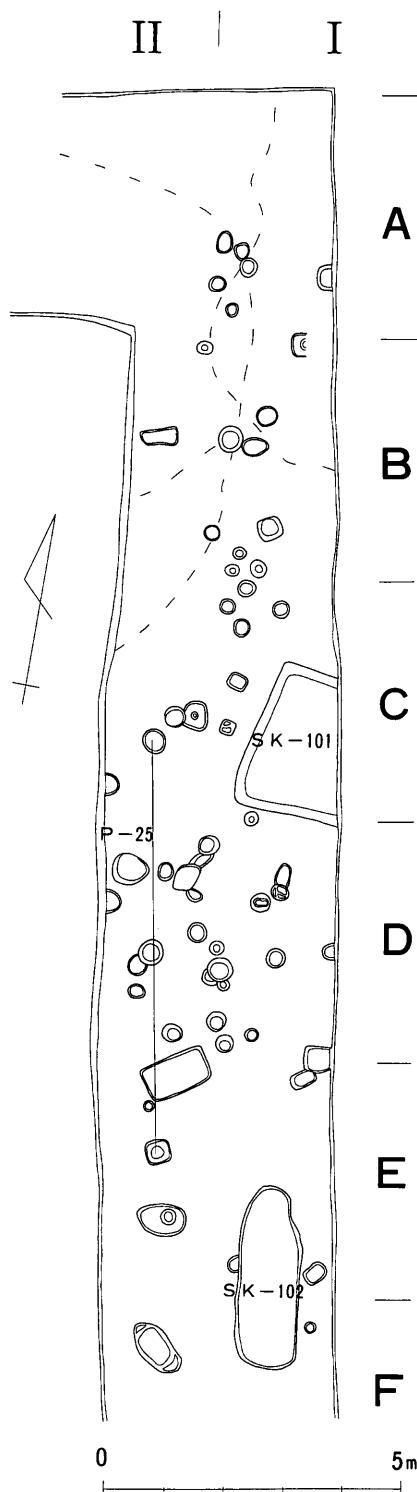
本調査地の地番は国府町矢野492-2であり、「溝添」の字名を有する。南西には弥生時代の一大集落である矢野遺跡が広がる地域である。調査は400m<sup>2</sup>を対象に、ほぼ南北方向のトレンチ状発掘を実施した。地目は休耕地であり現地表面で海拔6.0mを測る。当地は北側平野部よりも0.5mほど高く、矢野遺跡の立地する微高地の北端部にあたると考えられる。調査前においても弥生土器・



第5図 溝添地区調査地点位置図(1:2,000)

土師器・須恵器の散布が認められた。

本調査地の基本層序は、耕作土（第1・2層 層厚約20cm）、遺物包含層（第3・4層 層厚約30cm）、暗黄褐色シルト層（第5層 層厚約10cm）、以下砂礫層（第6・7層）となっている。第5層上面において弥生時代と歴史時代の遺構が重複するが、遺構面をなすこの層はI・II-A~F区（東側調査区）のみで確認された層であり、西側調査区では黒褐色遺物包含層の直下に砂礫層が存在するといった状況を示す。



第6図 溝添地区Ⅰ・Ⅱ-A~F区検出遺構配置図

### 1. おもな検出遺構（第6図、図版4）

前述のごとく、遺構はⅠ・Ⅱ区においてのみ存在するシルト層上面において検出された。検出遺構は土壙・柱穴に限定される。土壙は平安時代前期頃に比定されるもの1基と、弥生時代後期のもの1基が検出された。ピットについては両時期のものが混在すると思われるが、伴入遺物の僅少さなどから明確に識別することは不可能であった。掘立柱建物が存在していたであろうが、明確な建物跡の検出には至らなかった。

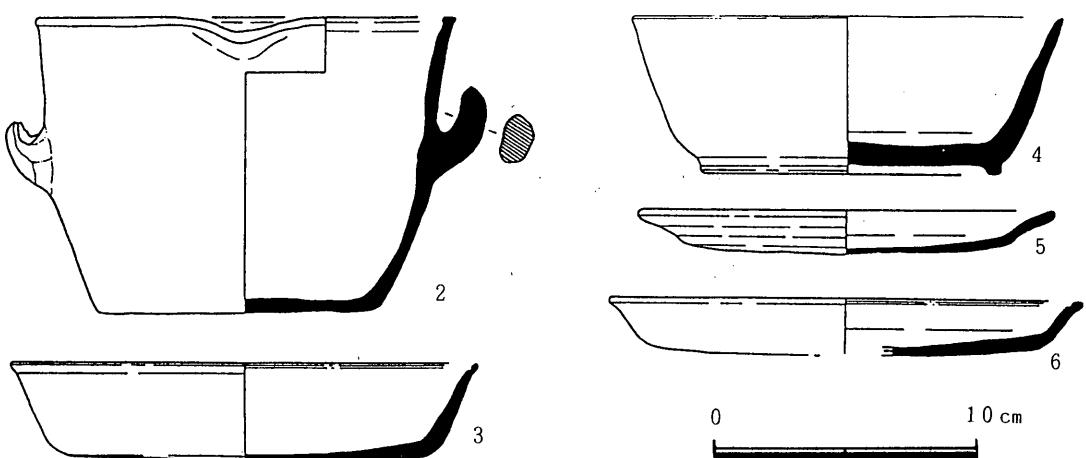
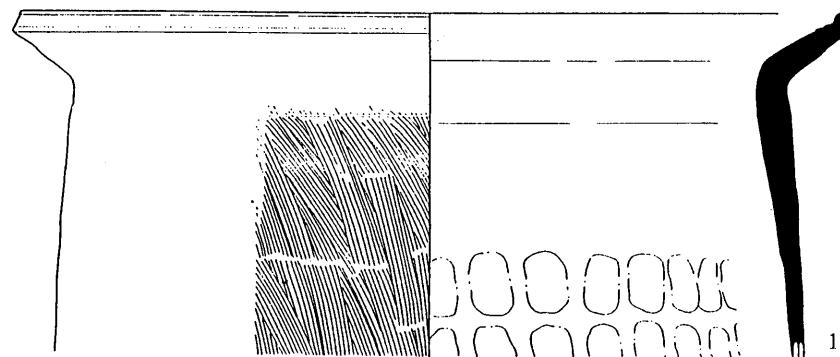
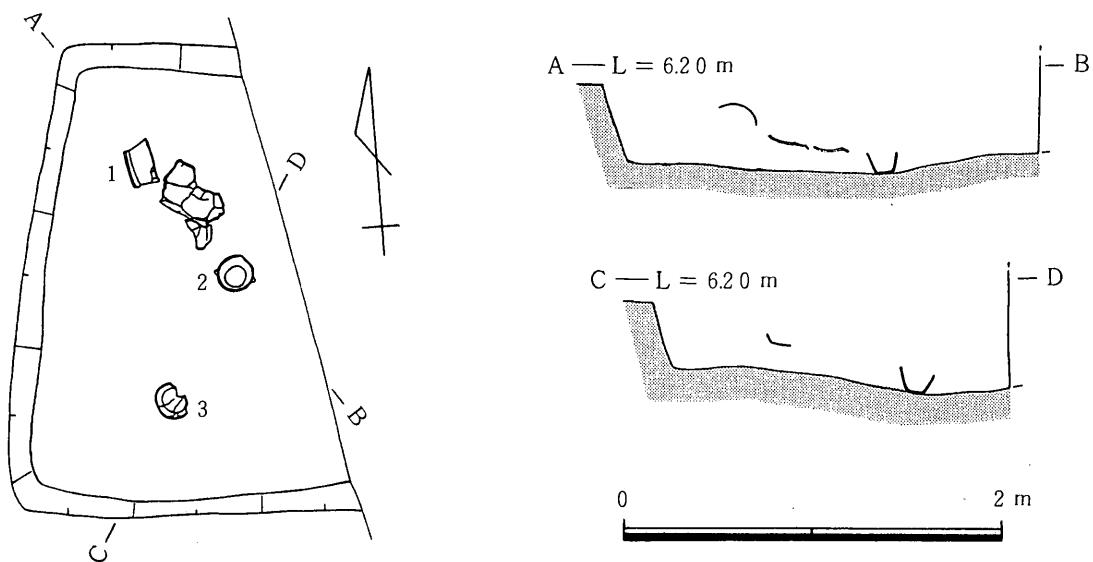
**土壙SK-101**（第7図）Ⅰ-C区壁際で検出された一辺約2.5m、深さ約40cmの方形土壙である。シルト層および砂礫層を掘り込んでいる。住居跡の可能性も考えてみたが、柱穴が存在しないこと、礫層上に貼り床等を施した痕跡が見られないこと、規模が小さいことなどを考え合わせて土壙として捉えた。埋土は灰黄褐色弱粘質土と砂礫が混在した单層である。土師器の甕・鍋・杯などが出土している。

**土壙SK-102** Ⅰ-E・F区で検出された弥生時代後期の土器廃棄土壙（土器溜）である。3m×1m、深さ約15cmを測る。甕・鉢・壺の一括資料を得た。矢野弥生集落の一端を成すものであろう。

### 2. おもな出土遺物（第7図）

国庁期に比定される遺物としては、土師器（椀・杯・皿・甕・鍋など）が主流をなし、須恵器（甕・杯）は破片が若干出土した程度である。

1~3は、SK-101の一括資料でいずれも土師器である。1は口径31cmの甕で同形態の甕がもう1点出土しているが、いずれも底部を欠失する。2は口径約12cmの把手付鍋で注ぎ口をもうけている。内面底部に一部丹彩の痕跡が残る。3の杯は口唇部内面に沈線を巡らし、内外面に丹彩を施している。4はPit-25出土の高台を持つ土師器杯で、奈良時代にみられる同器種の須恵器の形態を踏襲しているものと考えられる。土師器の皿は5、6のような中型のものが目立ち、小皿の出土は見られない。5は砂礫層直上からの出土であるが、同層は基本的には無遺物層である。



第7図 溝添地区 SK-101 および出土土器実測図

## IV 小 結

本年度の調査では、先にも述べたとおり国府の東限および南限の確認を目的とし、関連遺構の検出に努めた。

国府の外周をなす遺構としては、土壘あるいは大規模な堀などが予想されるが、今回の市道地区・溝添地区の調査ではともにそれらに該当する明瞭な遺構の検出には至らなかった。

市道地区で検出された溝SD-03は、調査区東側が用水路であったため拡張調査ができず、規模が不明のまま終わった。また遺物をほとんど伴わないので正確な年代決定も不可能である。しかし、本調査区検出の遺構群は、SK-04出土の瓦器碗等の一括遺物が示す時期に相前後するものと思われ、おおむね12世紀末～13世紀前半に比定される。溝SD-03もこの範疇に入るものであり、阿波国における国府の存続時期の問題もあるが、条里地割に一致することなどからも、後期国府域の東限をなす遺構である可能性も残されている。溝SD-03の規模の把握と、南北へ延長した地点での一連の溝の検出が望まれる。また、国府東限ラインをここに想定した場合、さらに東方に位置する大御和神社周辺地域で確認された遺構・遺物群の、国府との関連性等における位置づけも必要となってくる。

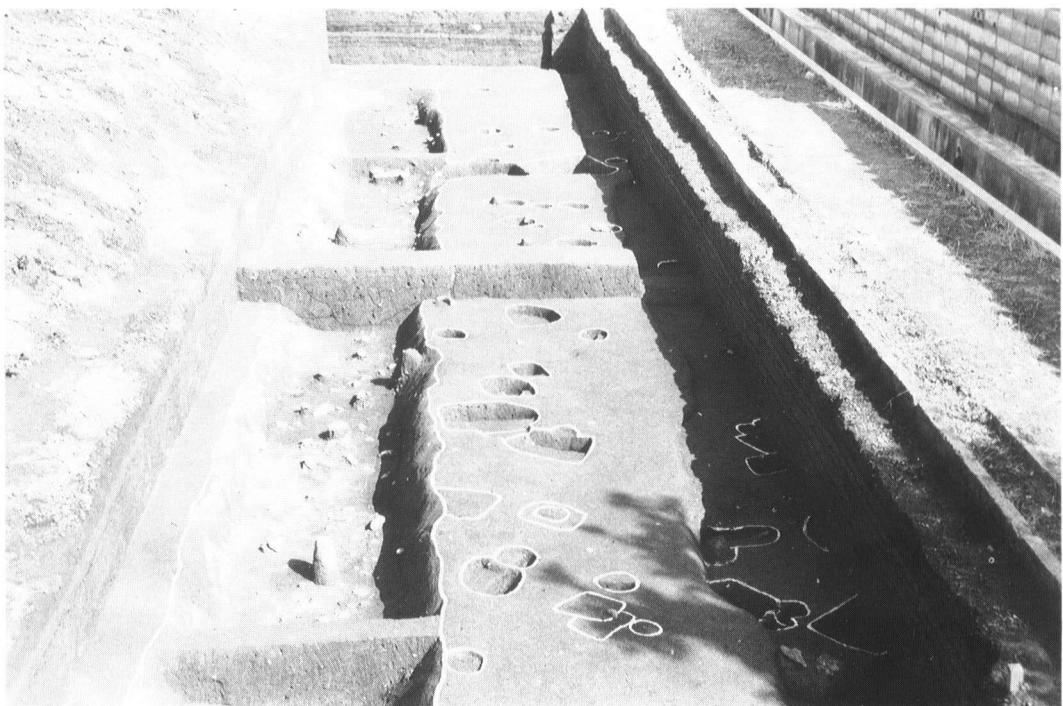
溝添地区においては、南限の可能性を示唆する遺構さえも確認できなかった。地形から見る限りでは、当調査地に北接する一段低くなっている畠地を東西方向に「大溝」が走る可能性が強いようと思われる。県教委による高畠遺跡の調査成果ならびに当地に「溝添」の字名が残ることなどからも、この付近に国府南限の溝が存在していたものと思われる。調査地の選定にあたっては、諸々の事情から困難を伴うが、より効率的な調査を実施して、早急に府域を確認することが望まれる。

なお、溝添地区検出遺構の年代は、土壤SK-101出土土器および包含層出土遺物より、10世紀を下らないものと思われる。

## 註

- (1) 徳島市教育委員会「阿波国府跡第1次調査概報－1982年度－」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第12集 1983. 3
- (2) 徳島市教育委員会「阿波国府跡第6次調査概報－1987年度－」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第17集 1988. 3
- (3) 徳島市教育委員会「阿波国府跡第8次調査概報－1989年度－」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第19集 1990. 3
- (4) 徳島県教育委員会『徳島県立国府養護学校プール建設工事に伴う高畠遺跡発掘調査概要報告書』 1990. 3

# 図 版



市道地区 I 区遺構検出状況 (西から)

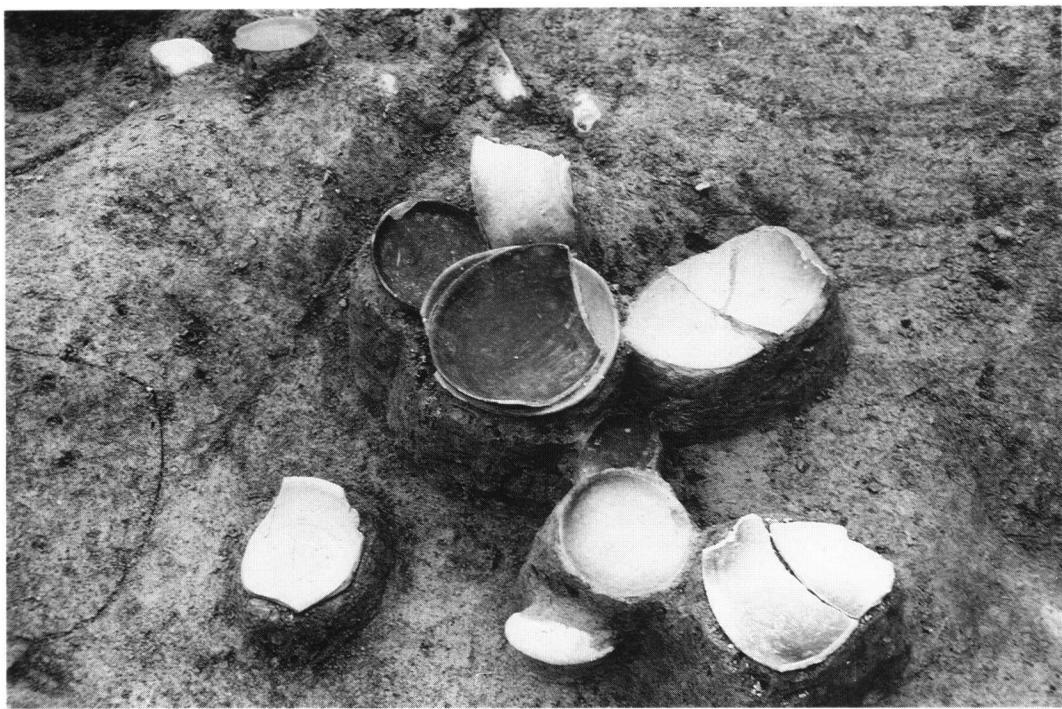


市道地区 II 区遺構検出状況 (西から)

図版 2



市道地区 SD-03 検出状況 (南から)



市道地区 SK-04 遺物出土状況 (南から)

図版 3



市道地区 SK-03 遺物出土状況 (北西から)



同上 (東から)

図版 4



溝添地区 I・II-A~F区遺構検出状況（南から）



溝添地区 SK-101 遺物出土状況（南から）

徳島市埋蔵文化財調査報告書第20集  
阿波国府跡第9次調査概報

— 1990年度 —

平成3年3月30日

編集 徳島市教育委員会社会教育課  
発行 徳島市教育委員会  
印刷 徳島印刷センター